

私の日本歴史研究

—経験と今後の課題—

アン・ウォルソール

私が、25年以上前に、日本の歴史、特に江戸時代の歴史を研究しはじめた時には、まだ日本とアメリカにおける日本歴史研究の間に大きいギャップがありました。というのは、日本の場合、マルクス主義の影響がつよくて、経済発展と共同体解体の問題が中心にあり、明治維新を説明すると、革命という概念がよく使われました。殆どの研究は明治維新、そして次の近代天皇制と戦争をもたらした原因を江戸時代に求めました。一例を挙げますと、佐々木潤之介氏の「幕末社会論」などは優れている論文ですが、アメリカにおける研究はもっと積極的、肯定的なアプローチをとりました。近代化論といいますと、歴史の流れに価値感をつけないといっても、経済発展そのものが価値のあるプロセスです。だから、日本人の歴史学者は豪農層が寄生地主となって農村共同体を解体させていく過程を厳しく批判するのにたいして、アメリカ人は同じ過程を見てそれが産業発展のために絶対必要な基盤として評価しました。皮肉なことですが、アメリカの歴史学者は日本史を研究する際に、日本人の歴史学者が開いた道に倣って、日本人の歴史学者が掘り出した史料を日本語の論文から抜き出して、これを英語に翻訳して日本人の歴史学者とは全く対照的な結論を作りました。もちろん例外はあります。アメリカにもマルクス主義の道を通った歴史学者がいますし、日本にも例えば斎藤修氏のようにプロト産業発展を江戸時代に認める学者もいます。

思想史の面では、丸山真男氏の荻生徂徠に関する研究はかなり早く英語に翻訳されて、学生達はよく読みました。丸山氏の論文を読むと、論点そのものについてアメリカの思想史学者は討論しましたが、江戸時代の思想史と天皇制のつながりに関する論点はあまり強調されませんでした。

私の専門であり、本も書いたことのある百姓一揆について言えば、日本には豊かな歴史研究の伝統があります。戦前からの研究は、論点の上にも大変大切な成果が現われて、過去への理解を増やしましたが、私にとって一番勉強になったのは、深谷克己氏の論文「百姓一揆の思想」と安丸良夫氏の本『日本の近代化と民衆思想』です。深谷氏も、安丸氏もマルクス主義と近代化論から離れて、百姓や民衆がどういうふう生きていたか、自分の生活、共同体、そして政治問題についてなにを考えていたかという問題について深く研究しました。

もうひとつの視点、身分制に関する塚田孝氏の論文はアメリカの歴史学者に強い影響を与えました。民衆史には色々な視点があって、政治史、経済史、また思想史を幅広くして、民衆を含めた新しい日本史が出来上がりました。といっても民衆史は殆ど男性史になる傾向があると思います。

今まで農村の経済状況を分析していたある歴史学者たちは80年代に女性史に目を向けはじめました。勿論、戦前にも女性史の研究者高群逸枝氏の論文を忘れてはいけません。高群氏は日本史全体を通して、女性の立場にはどういった変化があったかを説明しようとしていました。残念ながら、家父長制の関連で、日本の歴史のなかで江戸時代は女性にとって最悪だったと、80年代まで思われていました。しかし女性はいかならず歴史の被害者でしょうか。史料をもう一度分析すると、身分によって女性の経験がかなり変わったという発見は新しい女性史をつくるために一つの刺激になりました。1986年に近世女性史研究会が編

集した『論集近世女性史』はその新しい近世女性史の一つの大きな成果であると思います。その中に長島淳子氏の「幕末農村女性の行動の自由と家事労働」という論文は女性の年齢を区別して、嫁の自己達成と姑の自己達成について論じました。ジェンダー概念を含めて女性の役割と男性の役割を家事経済の面から分析する研究もあります。なお、脇田晴子氏が編集した『ジェンダーの日本史』という論集があります。こういう女性史の研究法は、伝統的な歴史学の関心——例えば幕藩体制の本質——を別にして、女性が直接に経験した歴史的状況を中心にしました。そうすると、新しい分野——例えば産婦人科の歴史——が創造されて、興味深い論点ができあがってきました。しかし大口勇次郎氏と薮田貫氏以外には、女性史に関して研究する学者は殆ど女性です。なお、もっと一般的な大きい問題について論じる歴史学者は、女性であっても女性史を殆ど無視しています。

だから、今後の展望というと、女性史を近世日本の一般歴史に統合することです。農村の経済発展における女性の役割について深谷克己氏と川鍋貞夫氏が論じたことがあります。農業史に関する研究の中に女性の特徴的な役割と役割の変化が必ず現われるかどうかについてちょっと疑問を持っています。経済史以外には、どうでしょうか。一つの示唆的な論文は長野ひろ子氏の「幕藩制国家の政治構造と女性——成立期を中心に」です。長野氏はエリート女性の立場から幕藩体制を分析して、歴史学の大きい問題に関して新しい視点を持っています。

そうして、政治経済問題を含めて、女性と男性の区別をはっきりさせるジェンダーという概念を、歴史学者の関心にいれていくことが、今後の課題ではないでしょうか。

元留学生からの提言

許 栄恩

私は1984年お茶の水女子大学に国費留学生として来日しました。当時は中曽根首相の留学生10万人計画が盛んに唱えられた時期でありましたが、それでもお茶大の留学生は40名ほどで、とても家族的な雰囲気でした。それが今は正規の留学生だけで100人を越えるまで成長して来たそうで、誠に今昔の感を覚えます。

当時の韓国からの留学生たちは今は韓国のいろいろな大学や高校で日本語や日本文学を教えています。就職して欲しい6、7年になる人がもっとも多いと思います。帰国して間もない頃は職探しや職に就いてからは慣れない先生業に試行模索の毎日だったと思います。私も今年就職6年目を迎え、サバチカルを利用して再び日本に来ました。ちょうどこういう時期にお茶の水女子大学に国際日本学という新しい専攻が生まれたことは実に時宜に適ったものだと思います。これからこの国際日本学が国際的なつながりを持つことを祈りながら、元留学生の立場から「新しい日本学構築」の為の提言をしたいと思いません。